



インタビュー

津あけぼの座 芸術監督
第七劇場 代表・演出家

Kouhei Narumi

鳴海康平

三重県文化会館は、1994年のオープン以来、音楽・演劇・ダンス・伝統芸能など様々な公演の開催を通じ、三重県の文化芸術の振興を担う活動を続けています。

特に演劇分野においては、官と民、地域といった壁を飛び越え、全国の劇場や劇団、演劇人とのネットワーク構築を築くべく、全国的に珍しい活動で注目されています。

今回は4年前に三重県文化会館に初登場、その後M-PAD^(※1)での公演など三重県内で精力的に活動し、今年4月津市に活動の拠点を移した劇団、第七劇場代表 鳴海康平さんにお話を伺いました。

—第七劇場はどのように結成されたのですか？
また、どのような活動を展開されている劇団でしょうか？

1999年、早稲田大学在学中に同じ学生劇団の俳優たちと立ち上げ、2002年に第七劇場と改称しました。「国境を越えられる作品をつくること」をポリシーにしています。私は戯曲は書かず、原作をもとに台本を構成し私が演出と舞台美術を務め、チャーホフや三島由紀夫など、世界で知られる作家の戯曲を上演してきました。

—国内各地にとどまらず海外でも活発に公演されていますね。

今まで日本国内では15都市、海外では韓国(2都市)、ドイツ(2都市)、フランス(パリ)、台湾(台北)で公演しています。また、私がポーラ美術振興財団在外研修員として2012年から1年間フランス・パリに滞在していた際に、日仏協働作品としてフランス人俳優と日本人俳優とともに『三人姉妹』(原作：A・チャーホフ)を製作し、2013年に新国立劇場にて上演しました。

—三重県文化会館では2010年12月にA・チャーホフ『かもめ』でMゲキセレクション^(※2)第一弾に選ばれました。2012年には三島由紀夫『邯鄲』も上演いただいています。

2007年に東京で初演し、2010年の名古屋公演の際に大きくリメイクした私たちの『かもめ』は、ワールドツアー・日本公演でもあったMゲキセレクションの際にもさらにブラッシュアップし、以降、国内外7都市で上演する私たちにとって記念碑的な作品になりました。そして魅力的な現代演劇を定期的に紹介するという、国内では珍しい企画であるMゲキセレクションの最初の一步を飾らせていただいたことはとても光栄です。その後、



「シンデレラ」会場：Théâtre de Belleville 撮影：西岡真一

2012年に呼んでいただいた三島由紀夫『邯鄲』は、私がフランス研修中に一時帰国して上演したもので記憶に強く残っています。

—東京を活動拠点にしていた劇団がどうして三重県津市美里町に拠点を移すことになったのでしょうか？

東京などの大都市は生産と消費のサイクルが早く、文化も、もちろん演劇の作品創造もその例外ではありません。しかし、私たちは良質の作品を時間をかけて製作し、その作品をもって国内外のツアーに出て行くことを活動の軸にしています。そのため、東京の消費サイクルは私たちの作品づくりのベースには合わないと感じ、拠点を東京の外へ移す準備をしていました。その折、2010年、三重県文化会館で『かもめ』を上演したとき、公立である三重県文化会館の真摯な文化振興への姿勢と、特定非営利活動法人パフォーミングアーツネットワーク、特定非営利活動法人パフォーミングアーツネットワークの官・民協働の取り組みに感銘を受け、津市に拠点を移す決意をしました。拠点移設についてPANみえの油田さん、山中さんに相談したところ、私たちのモノづくりのスタイルに合う環境として、個性的な文化人やクリエイターの多い津市美里町を紹介してくださいました。そして2014年1月からPANみえが管理運営する津あけぼの座、津あけぼの座スクエアの芸術監督としての任を受け、2014年4月に住居も津市に移しました。

—今年11月に倉庫を改装した手作りの劇場「Théâtre de Belleville(テアトル・ドゥ・ベルヴィル)」を美里町にオープンしました。大変な作業だったとお聞きしています。

大変でした。そして今も大変です(笑)。まずは倉庫内の不要物を整理することからのスタートで、地域の方々にご協力いただき紆余曲折を乗り越えながら、約一年間の作業を経て、2014年11月にこけら落とし公演を迎えることができました。ですが、まだまだ作業は残っているので、現在もこつこつ改装作業中です。もちろん、これは産みの苦しみで、より良い劇場空間のために、楽しく苦労しています。

今まで公演で出会った方をはじめ、友人のアーティストや、劇場文化に理解ある方など、日本中から多くの応援としての寄付もいただきました。劇場体験はテレビや映画に比べて体験できる人数が少なく限られるという性格をもつ文化ですが、限られるからこそ可能になる豊かさへの理解と期待の大きさを感じ、応援いただ

たことへの感謝とともに身が引き締まる思いです。

劇場はショッピングセンターのような商業施設ではなく、学校や病院と同じ性格を持つ公共施設です。教育を守る学校、命を守る病院、劇場は文化を守る場所です。倉庫の家主をはじめ、文化に理解がある方のサポート、そしてそこに集まるひととともに劇場が文化を育て発信する場所として成長していくことが可能になります。

津あけぼの座・津あけぼの座スクエア・Théâtre de Belleville 芸術監督として、またレジデントカンパニー(専属劇団)である第七劇場の代表・演出家として、みなさんからの応援を、その本人だけではなく、それをバトンとしてまた他のひとや次の世代に、文化の力で必ずお返ししていきます。

—こけら落とし公演では「シンデレラ」を上演されましたが、「シンデレラ」を作品に選ばれた理由は？またお客様の反応はいかがでしたか？

演劇を見慣れている方にも、はじめて演劇を観たという方にもとても好評で、うれしい感想をたくさんいただきました。終演後に美里産の味噌を使った美里鍋を振舞ったのですが、こちらも大好評でした(笑)。

こけら落とし公演の演目については油田さんからの提案で、老若男女が楽しめる作品を製作しようと考えていました。新しい劇場のオープンでもあり、私たち第七劇場のことも含めて広く知ってほしいという思いから、広い年代で知られている『シンデレラ』を選びました。おかげさまで全てのステージが満員御礼で終えることができました。また、私たちがこれまで公演してきた地域をはじめ、東京はもちろん、北は北海道、南は広島まで、遠方から美里に観に来てくださった方も多かったです。ご来場くださった方の1/3近くが美里在住、在学、在勤の方でした。また劇場前を通りかかったおばあちゃんから話や話を聞いたという方が来てくださったりと、地域のための劇場を目標のひとつに掲げている点から考えても、とてもうれしいことでした。劇場が育ち、観客にとっても、表現者にとっても、豊かな人生のために有効に機能するためには、人口の多さが最重要ということではなく、そこに人が集まるかどうか、集まる魅力を提示できるかが大切なのだと感じています。



Théâtre de Belleville
こけら落とし公演舞台「シンデレラ」
津市長とのアフタートークにて

—今後の三重県を拠点とした活動の展望をお聞かせください。

芸術監督として3館の劇場を通して、良質な公演だけではなく育成や支援、ネットワークづくりなど、ひととひと、ひとと文化をつなげるプログラムを実施していきます。劇場体験は、自分とは異なる価値観と出会う機会です。その体験は、自分の価値観を広げると同時に、他者に対しても、自分に対しても理解を広げることにつながります。劇場体験という文化は、人生を豊かにする材料に溢れています。ただ、受け身で観るのではなく、作品や自分、隣に座っている他人など、さまざまなことに思いを巡らせたり、自分の言葉で話したりすることで、生きることをより色鮮やかにすることができそうです。その意味では、劇場とはあくまで人生を楽しむツールでしかありません。ぜひもっと劇場というツールを自分の人生の充実のために利用してほしいと思います。また、そのために私たちは日々準備し、プログラムを実施していきます。私の目標は「文化を使って人生を豊かに過ごしている県、三重県全国一位」です。

第七劇場としても、Théâtre de Bellevilleの専属劇団として、一年にひとつの新作のペースで製作し、津で初演し、国内各地、そして海外に向けて美里から発信していきます。またこれまでの製作したレパートリー作品も積極的に再演していきたいと考えています。

※1 M-PAD
「おいしくてあたらしい料理と演劇のたのしみかた」を提案する公演シリーズ。2011年より始まり、昨年で4回目。三重県内の飲食店・寺院を会場に、素敵な料理と俳優の身体を通じて名作・古典を読むリーディング公演をセットでお楽しみいただけます。(毎年11月に実施。)

※2 Mゲキセレクション
注目の演劇人や劇団を三重県文化会館が独自にセレクトし、いち早く紹介する公演シリーズ。過去に登場した劇団が、若手劇作家の登壇門「岸田國士戯曲賞」を次々と受賞するなど、三重県文化会館のセレクトが全国的に注目されています。

鳴海康平 profile 津あけぼの座、津あけぼの座スクエア、Théâtre de Belleville 芸術監督、第七劇場 代表、演出家。1979年北海道紋別市生まれ。三重県津市在住。早稲田大学在籍中の1999年に劇団を創設。俳優の持つ身体性/現前性、人工的で現代的な舞台美術、テキストに内在するドラマを並列的に共存させて、「時間をともなう蓄積された風景」によるドラマを舞台作品として構成。ストーリーや言語に頼らないドラマ性が、海外で高く評価される。国境を越えることのできるプロダクションをポリシーに、これまで国内15都市、海外4ヶ国6都市で作品を上演。演出以外にも、フェスティバルディレクターやアドバイザー、日本各地での俳優や市民、学生を対象としたワークショップ、アーツ・マネジメントに関する勉強会のファシリテーター、小学校や早稲田大学、三重大学などに特別講師として招かれるなどの、教育・育成活動も行う。財団法人舞台芸術財団演劇人会議員。SENTIVALフェスティバルディレクター(2008-2013)。芸術文化活動支援員(文化庁・2010年度芸術文化活動支援員派遣事業)。ポーラ美術振興財団在外研修員(フランス・2012-2013)。